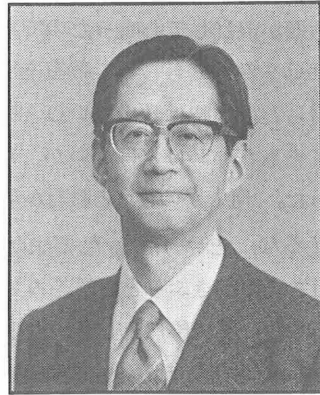


平川浩正先生の思い出

坪野公夫（物理学教室）

昭和61年11月18日午後10時48分、理学部教授平川浩正先生は虎ノ門病院にて、敗血症でお亡くなりになりました。57年間の生涯でした。

食物がどうもうまく飲み込めないと異常を訴え、病院へ行って食道の内視鏡検査を受けている最中に大量出血し、そのまま慌ただしく入院という事態になったのは、その約1年前のことでした。結局今回の疾病は5年ほど前にもそのため入院・手術をしたことのある胸部疾患の再発だったわけです。食道に穴があいたせいでそれから間もなくして、飲食を一切やめさせられ外部からの摂取は点滴だけに頼るということになりました。かねがね美味しい物を食べるのが趣味だとおっしゃっていた先生にとって、辛い状態が最後まで続きました。それでも先生は明るく「食事にとられない分だけ時間をたっぷり使えていいんだよ」と、おっしゃっていました。実際、過酷な条件であるにもかかわらず、ある時はベッドの上に座りながら、またある時はベッドに横たわりながら、先生は入院中とは思えないほど精力的に仕事をおやりになっていました。今から思うと、まるで残された時間を惜しむかのように、15年前に出版した相対論の教科書の大幅な改訂に取り組み、ついに入院中にそ



れを完成させました。そうして出来上がった改訂版の序文の最後を「虎の門にて」と結んだ時の先生の心情を察すると、胸が熱くなるのを押さえることができません。

先生は昭和27年東京大学理学部物理学科を卒業し、引き続き研究奨学生として大学院に進み、これを修了後昭和32年日本原子力研究所研究員に採用されました。昭和36年本学の助教授として着任され、昭和52年に教授に昇任されてからは理学部物理学科力学第二講座を担当されていました。

先生の学問的業績は、原子・分子のマイクロ波分光学、線型加速器、特に加速器のビーム電流と

加速空洞との相互作用によるビーム不安定性の研究、陽子・重陽子の動的スピン偏極を中心とする物性物理学、そしてその後に着手して最期に至るまで継続した重力波および重力の研究等々物理学の広い分野にまたがっています。

先生がこの20年近くもっとも情熱を注いだ研究課題は、アインシュタインの一般相対性理論からの帰結である重力波を実験的に検出することでした。重力波の検出という、未だ誰も成功していない困難なテーマを選んだのは、相対論からの帰結としての重力波に魅力を感じたのと、未開拓の分野にチャレンジする精神があったからだと思いません。重力波検出の分野では、諸外国のグループには真似の出来ない斬新なアイデアを次々に出し、それを具体化して着実な成果をたくさんあげています。さらに最近では、重力波検出の技術を応用して、重力の基本的性質（逆2乗則）を調べるというユニークな研究も世界的に注目されています。重力波と重力の理論的および実験的研究において、先生は世界的な指導者の1人となって活躍し、また同時に東大理学部をこの分野の世界的な拠点の1つとしました。これらの領域で特筆すべき先生の業績は数多くありますが、いずれも卓越した数理物理学的考察と独創的な着想にもとづくものばかりであります。

昭和61年度より、検出感度の大幅な向上を目指した重力波次期大型プロジェクトが始まりました。実験計画や実験装置の考察、設計等について、最初の頃は先生が病床から直接指揮をとられていました。しかし8月の下旬頃からは、私達が面会に行っても先生はどこか具合が悪そうで、いろいろご相談したかったのですがそれも出来ずに帰るといふ日が多くなりました。先生も半ばで力が尽きてとても残念だったに違いありません。病床の中で、うわ言のようにこの計画の進行を気づかっていたと聞きます。

平川先生は研究ばかりでなく、教育ということに対してもとても熱心でした。それは物理の教科書「電磁気学」、「相対論」、「電気力学」、「力学」

等の名著を残されたことにも表れています。これらの本の中には、数学的基礎づけをきちんとやりながら、かつ物理的直感を重視するという先生の学風が貫かれています。また、大学にいるときには、毎日のように私達のいる地下の実験室に降りてきて、1人ずつ実験の進行状況を尋ねたり、研究上のアドバイスを授けて下さいました。何かトラブルが起きたときには、先生に聞けばいつもの確な解決法を示してくれる、という安心感が私達にはありました。先生がいつも口にするのは「教育的見地」という言葉でした。たとえ全体の研究がそれによって滞ることがあっても、研究室の中では常に教育ということを最優先に考えそれを実行していました。

11月25日、信濃町の千日谷会堂でとり行われた先生の告別式で、バックに流れたA. Brendel 演奏の Beethoven ピアノソナタ31番は、病床で先生が自ら万一の時にはと指定した曲でした。クラシック音楽を愛し、自らピアノを弾き、油絵を描いた趣味の広い先生でした。先生にはまだまだこれから、たくさんのことを教えて頂くつもりだったのでもう取り返しがつきません。ただただ残念でたまりません。